

二〇二四年九月二七日

箒目のままに掃かれて萩の屑  
鱗雲 大海原を覆ひけり  
せめぎ合ふ紅白の萩ひと括り  
夕づきて蒲の穂己が影払ふ

澄子  
きよえ  
うつき  
むべ

二〇二四年九月二六日

父の名を墓石に加へ秋彼岸  
左見右見すれば調べの変はる虫  
雀どち登りて凹む初山の  
心経の和尚に侍り秋彼岸  
畳み跡くつきり残る昼寝の子

むべ  
康子  
愛正  
うつき  
みきお

二〇二四年九月二五日

畑へとなぞへなす土手草の花  
残像に上書きをする大花火  
広芝へなだるる萩の花アーチ  
観音に呼び掛けるやに虫すだく  
新涼の墓に供へし煙草かな  
清閑の一と日を得たり萩を観る  
涼新た運筆飛ぶが如きなり

風民  
みきお  
康子  
ぼんこ  
ほたる  
うつき  
せいじ

二〇二四年九月二四日

秋風に譜面押さへし楽士かな  
菊枕棺の隅にそつと入れ  
墓参り一族郎党宴会に  
文机に影す梢や涼新た

むべ  
みきお  
明日香  
むべ

二〇二四年九月二三日

庭に得し花よと手向く墓参かな  
不揃ひや農夫が打ちし走り蕎麦  
嘴のつひに開かず石榴の実  
掘りたての土の匂ひや芋洗ふ

明日香  
うつき  
風民  
むべ

二〇二四年九月二二日

朝経と共に お供へ今年米  
コスモスや休耕田の華やぎて  
あつまりてまた散り散りに芋の露  
芋虫を垣根の外へ逃しやり  
山峡に白波立ちて蕎麦の花

千鶴  
ふさこ  
ほたる  
明日香  
うつき

二〇二四年九月二二日

日焼けの腕吊輪にならぶ下校バス  
道曲がるたび楽かはる虫浄土  
頬杖をつくブロンズ像秋を聞く  
バラックの農家食堂走り蕎麦

なつき  
澄子  
康子  
うつき

毎日句会みのる選・二〇二四年九月二九日